

## フランス植民地の人びと

カルチエがカナダに達してから七十三年後の一六〇八年、サミュエル・ド・シヤンブレンが、セント・ローレンス川河畔にある絶壁のふもとに、アビタシオンと称する交易所を兼ねた砦を建設した。これが今日のケベック市のはじまりである。

フランスは、以後百五十年にわたって、セントローレンス川流域、さらにはメキシコ湾にいたる広大な地域を、植民地として統治することになった。

## 貴族まかせの植民地経営

しかし、こうしてせつかく手に入れた植民地「ニュー・フランス」であったが、その経営は毛皮を取り引きする貴族や金持ちの商人にまかされた。彼らは一獲千金になる毛皮貿易にのみ力を注ぎ、国王に約束した植民のほうにはほとんど関心を示さなかった。植民は高い金がかかるだけでなく、ビーバーの生息地を荒らすからである。

したがって、当初フランスからやってきたのは、毛皮商人と探検家が大部分だった。

同時に、宗教改革に続いて起こったカトリック教会内の改革運動に刺激されて、フランシスコ修道会やイエズス会などを

はじめとするカトリック教のいろいろな宗派が、「蛮人」とみなされたインディアンを教化しようと、カナダに宣教師を派遣した。

ケベック最初の植民者ルイ・エペーが妻と三人の子供をひきつれて開拓をはじめたのは一六一七年であるが、新植民地の人口は遅々として増えず、十年たつてもわずか六十五人しかいなかった。その年（一六二七）に、毛皮貿易の独占権を得た百人の金持ちによって創立された「ニュー・フランス会社」——一般には

「百人組」として知られた——が、四千人の植民者をフランス本国からカナダ植民地へ移住させることになった。しかし、移住者を乗せた船が英国側に捕され、ケベックも占領されたため、その計画は失敗した。それどころかすでに居住していた八十五人のうち、六十人はフランスへ送り返されるありさまだった。

三年後、英仏間の条約により、ケベックはフランスに返された。ニュー・フランス会社は毛皮貿易の独占権を回復する一方、今度は個人や教会に大きく区切った土地（荘園）を与えて、一切の管理をまかせた。移住者をつれてきて土地を開拓させるのは、それ以後、これらの管理

者、すなわち荘園主の仕事となる。一六三九年には、モントリオール島も、荘園としてある宗教団体に譲与された。それでも、ニュー・フランスの人口は、一六六三年の時点で約二千五百人に過ぎなかった。

ところが、その頃になると、毛皮貿易はイロクオイ族のたび重なる攻撃とビーバーの乱獲によって、ほとんど採算が合わなくなる。そこでニュー・フランス会社は特許状を国王に返却した。

フランスは、ここで初めて、これまで放置していた植民地の経営に本格的に乗り出してくる。

## ルイ十四世の統治

その頃、フランスでは、「太陽王」と呼ばれたルイ十四世が親政を行なってお



ニュー・フランスの人口を増やすため、フランス本国から国王が後見人となる未婚の女性およそ900人が送られた。いわゆる「王の娘たち」である。

り、カトリック思想と重商主義に支えられた絶対主義を強力に押し進めていた。ルイ十四世は、カナダでもニュー・フランス会社が返還した植民地を直轄領と定め、自ら任命した役人を通じてその運営に当ることになった。

国王は、まず、ラバル大司教、六百人の正規兵、タロン地方長官などをカナダに派遣して、非友好的なインディアンを平定する一方、フランスの政治機構や社会制度、文化をそのまま植民地に移植した。

初代地方長官ジャン・タロンはニュー・フランス中興の祖といわれるが、そのタロンがまずやったのは植民地の人口をふやすことであった。一六六三年から最初の二十年間に、およそ二千五百人の植民者がニュー・フランスに送られた。その多くは農民と老兵で、農民は開拓に、老兵は遠く離れた開拓村を守るのに役立つ。

若い娘も多かった。これらの娘たちは、私生児やみなし児などをフランスのいろいろな地方から集めたもので、「王の娘たち」として、カナダにいる独身の兵隊や開拓者と結婚して子供を生むために送られたのである。彼女たちには、それぞれ牛二頭、豚二頭、鶏二羽、塩づけ肉二樽、そしてクラウン貨幣十一個が、「持参金」として国王から授けられていた。牛、豚、鶏はそれぞれ雌雄つがいになっていた。もちろん繁殖させるためである。新夫には、そのほか、無償で土地や農耕に必要な道具も与えられた。